考古学・民族学から文化資源学へ：「キムラン陶磁器歴史博物館」からの一考察

西野範子・西村昌也

ベトナム首都、ハノイ市から紅河沿いに 10km 下ったところに「キムラン陶磁器歴史博物館」という村立博物館がある（図 1, 2）。

図 1　キムラン村の位置

それは、ベトナムで最初の村立博物館であり、キムラン村古老の村に対する深い思いと、古老が昔、村の寺子屋で学んだ漢文の学識を基盤とした郷土史研究成果が発端となっている。キムラン村は今や、ベトナムのテレビや新聞に紹介されるようになったが、それまでは、注目されることのない普通の村であった。村人たちが自分で自分たち村の価値を発見し、研究者である筆者らは、その熱意に押されるように、考古学や民族学という学問を活かして調査、研究を行い、村の歴史を、村の博物館に体現した。その建設費は活動を応援してくださった有志の日本の方々及びベトナム人の支援によるものである。

本稿では、キムラン村で考古学・民族学によるキムラン史形成の成果と、その成果を文化資源として博物館の展示に体現した経緯を見ていきたい。

1．キムラン村古老による歴史研究会の遺跡発見

キムラン村は、陶磁生産地として日本人観光客に有名なバッチャン村の南隣に位置する。ベトナム陶磁器を研究する場合も、陳朝期には文献で確認され、現在も陶磁器生産が続いているバッチャンが、研究の要になってきた。キムラン村を含め、バッチャンの周辺村落の人々は、常にバッチャンを意識しながら生活してきたように思われる。ただ、長年に亘る陶磁器生産の結果、陶磁器の堆積層が厚く、バッチャンでは未だ発掘調査が行われていない。

そのような中で、キムラン村の古老達の歴史研究グループ（図 3）は、自分の村の川べりで多量の陶器片を発見し、自分の村はバッチャンよりも古いのかもしれないという仮説を考えたのであった。そこで、ベトナムの考古学院に連絡があり、考古学院と私達と共同

図 2　キムラン陶磁器歴史博物館外観

図 3　キムラン村の歴史研究グループの古老

で発掘調査を行うことになった。

2．調査により明らかなったキムラン村の歴史の概要

考古学院と私達の調査、そして良質の陶磁器が沢山出土することから、ベトナム歴史博物館も調査を行い、2001 年から 2003 年までで 3 度の発掘調査が行われた。また同時に、古老への聞き取り調査や　集落の地理的調査も行い、キムラン村の歴史が明らかになっていった。その概要は以下の通りである。

キムラン（旧名：金蘭）は、我々の考古学調査で村の歴史は、唐朝が支配していた 8-9 世紀に遡ることが確認できた。唐朝の名将高駢が雲南の南詔を撃退した後に大羅城を築くが、その時キムランを風水の重要地点として選んだという伝承がある。事実、高駢を祀っていたデン（神社）がキムラン眼前にあった中州に 18 世紀まで存在していたし、現在でもキムラン村では高駢や配下の武将を廟で祀っている。

発掘調査の結果は、李・陳朝期（1010 年～ 1400 年）の高級な施釉陶磁器が多く出土し、焼成道具や焼成不良品も確認でき（図 4）、その頃陶磁器生産を行っていたことが明らかとなった。

李・陳朝期の大型建築に使われる瓦やレンガや大型建築遺構も確認できた（図 5）。

14 世紀には青花や鉄絵の碗皿、青磁の壺などの優品も生産しており（図 6）、圧巻は鉄絵と青花の文様両方を釉下に描いた青花鉄絵磁器（図 7）で、ベトナム陶磁器としては、他に類例をみない。

このような高級陶磁器の生産や大型建築建設には、それなりの政治・経済的背景があるはずで、筆者は、李・陳朝期のキムランが、タンロン周辺に散在していた国家の管理を受けるような集落で、その役割の 1 つに陶

図 4　キムラン採集李朝期緑釉龍文印花合子

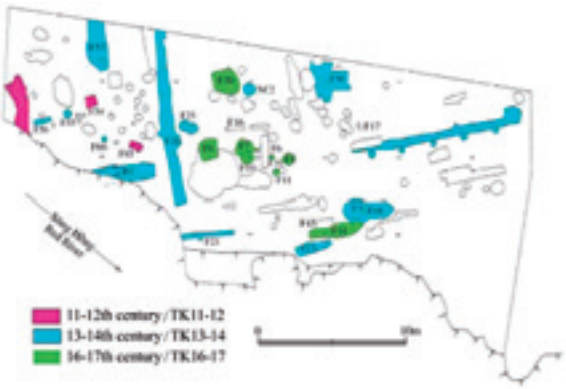

図 5　キムラン・バイハムゾン遺跡の遺構図

図 6　14 世紀後半青花大盤

図 7　14 世紀後半　青花鉄絵盥

磁器生産があったと考えている。当時のバッチャンもそうであったかもしれない

15 世紀初頭に明に支配され、黎利(レロイ)が、昇龍（タンロン：現ハノイ）を占拠する明軍と紅河を挟んで対峙したときに、キムランやバッチャンにレロイ軍が駐屯した。後に黎朝の開国功臣となる黎可朗(レカーラン)は、キムラン出身の女性を娶り、ここに土地を拝領して住んだことになっており、その子孫が今なお村に住んでいる。黎聖宗期にキムランには国家管理の屯田所が設置されるが、その伏線のようだ。15 世紀のある時期まで陶磁器を生産していたと考えられるキムランだが、15 世紀末には洪水で分村を余儀なくされる。16 世紀後半以降、ムラの本格的居住が復活したときには、陶磁器生産ではなく、廃銅の回収で地金造りのようなことを行っていた可能性が高い。

18 世紀にはキムランは養蚕地として名を馳せていたようである。これは提外地が桑栽培に適していることによる。聞き取り調査では、養蚕は 20 世紀前半まで行われていたようである。その頃は生計的にも苦しくて、米の生産力に乏しいキムランの人は、トウモロコシを主食としていたという（図 8)。

そして、ベトナムが独立して社会主義化を進めると、バッチャンの窯業は工場化され、今までバッチャン窯主に雇われていたキムランの人は工員になり、窯業技術が多くの人に共有されるようになった。これが後にドイモイ政策の敷延となる生産活動の自由化時に、キムランの人が自宅で窯業を始めるきっかけとなって、2009 年にはハノイ市よりキムラン村は伝統窯業村と認定されるまでになった（図 10)。

（西野 2011,2012a,2012b, 西村 2003, 2005, 2007, 2011, 西村・西野 2005, 2011a, 2011b, Nishimrua & Nishino 2003）

3．発掘報告～現地説明会と村内で行った発掘結果報告会の効果～

発掘現場において、発掘担当者が行う「現地説明会」は、今や日本では定着しているが、ベトナムではそのような発想はない。

通常、ベトナムでは発掘後、県庁所在地にある博物館や文化情報局で研究者と管轄の役人に対して、発掘成果の説明会が行われる。ベトナムではまだ、市民に向けた現地説明会を行われてこなかった。

図 8　ウモロコシから作った主食（当時のものを復元）

図 10　キムラン村への伝統窯業村認定書

図 9　現在のキムラン村の陶磁器生産風景

図 11　キムラン村における現地説明会

その中で、西村は、現場で現地説明会を行い、村人が集まる中、まだ遺構が露出している現場で、村人に発掘調査の説明を行った（図 11）。

そしてその後、村役場の広場で、キムラン村の発掘結果報告会を行ったところ、5000 人の人口村において 1000 人もが参加してくれた（図 12）。

これらの村人の関心の高さと熱心さを見て、村の幹部、古老研究グループそして私達で博物館を建設しようという話が持ち上がったのである。（西村・西野 2011b）。

図 12　キムラン村における調査報告会

4．キムラン陶磁器・歴史博物館建設

1) 資金集め

博物館建設というアイデアは決まったものの肝心の資金を集めなければならなかった。我々は東南アジア埋蔵文化財基金での寄付活動に努めたのだが、高額の資金を集めることはかなり難しく思われた。公的な助成金に頼ることもできたのかもしれなかったが、多額の資金が村に入ることにより起こりうる弊害を考えると憚られた。そんな時、以前から知古を得ていた関西財界人の方が、友人や知人、著名人に声をかけてくださった。また、キムラン出身の外交官やハノイ市人民委員会幹部の方も、寄付や寄付宣伝活動に努めて下さり、総額 30000$ を集めることができ、建設に一定のめどが立ち、2007 年 11 月に、建設資金の贈呈式を行った。博物館の設計は、ベトナム建築史研究の大田省一氏とハノイの建築家グエン・クアン・ホップ氏が申し出てくださり、建設実現は一気に具体化するかにみえた。　しかし、翌年 2008 年、ベトナム経済は突然のインフレに見舞われ、物価が 2 倍に急上昇してしまい、また建設資金が不足するという事態に陥ってしまった。この後、建設資金繰りに四苦八苦したのであるが、結局、キムラン社人民委員会自身がハノイ市と交渉して、不足分予算を獲得することが出来たのであった（西村・西野 2011b）。援助プロジェクトにありがちな“おんぶにだっこ”的な援助漬けプログラムにならず、村自らが予算獲得に動いたことに、村の熱意を見てとることができたし、逆に我々も一段と気を引き締めることができた。

2）設計から建造物の建設へ

建物を建設する際に、問題になってしまったのは、ハノイ市に資金申請する為に提出する資料を作成するため、キムラン村幹部がベトナムの業者により大田氏が設計した博物館模型を元に設計図を作らせてしまったことである。大田氏の模型を元に作られているので、骨格は大田氏の意に沿うものであったが、詳細部においては若干異なってしまっていた。それを大田氏の意図に修正するために、建設業者とキムラン村の幹部と交渉して、どうにか大田氏の納得する建設物を作るために何度もキムラン村に足を運んだ。（詳細については、西野（2012）の報告を参照いただきたい。）そして、2011 年 1 月末に博物館の建物が完成した。

3）展示施設

A. コンセプト

まず、展示を設計するにあたり、以下のようなコンセプトの下に展示することにした。a）キムラン村の発掘調査に基づき、遺物からキムラン史を考察する、b）ベトナム陶磁通史の説明、c）陶磁器を通じた世界の交流史、d）現代のベトナムの窯業技術工程および近現代技術史、e）現代陶芸家の作品という各テーマごとの展示である。

B. 展示ケース設計

ベトナムの国立博物館などでは、当時既に、海外から輸入した空調付高品質の展示ケースが導入されいるが、予算の制限から、ベトナムで製作できる前提の展示設計を考えた。日本、東南アジアの様々な博物館の展示ケースを調査したが、ベトナムでの製作を考えると、ベトナム歴史博物館の従来からあるタイプの展示ケースが最も参考になり、図 13 のような展示ケースを設計した。

そして、キムラン村で木工業を営む世帯があり、比

較的品質のいい製品を製造しており、発注を頼むことになった。これは、キムランの地場産業活性化にも貢献している。

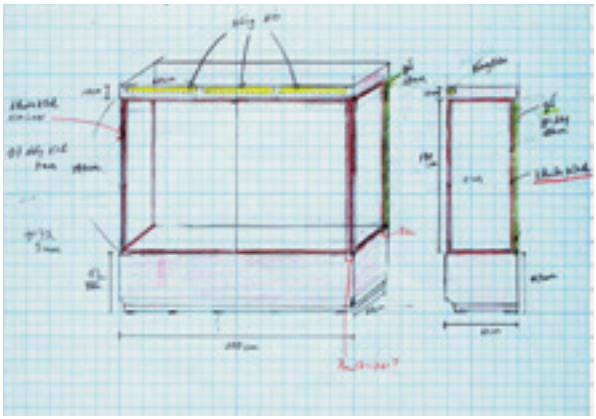

図 13　展示ケース設計図

C. 各展示および動線

参観は、入り口から入って左回転に一巡する。開館後、博物館に入ってくる村人を観察していると、博物館閲覧に慣れていないために、どこから見たらいいのか分からないようであり、動線についてもわかりやすく提示する必要が感じられた。

以下のような展示を行い、パネル説明をつけた。

①パネル「はじめに」:この博物館が建設されるに至った経緯について説明する
②展示ケース 1「キムラン村の発掘調査の成果 1 ―キムラン社への居住はいつから―」北属期から李朝まで
③展示ケース 2：キムラン村の発掘調査の成果 2 ―陳朝期について
④展示ケース 3：ベトナム陶磁の世界
⑤展示ケース 4：アジアの土器・陶磁器の世界
⑥展示ケース 5：17 世紀以降のキムラン
⑦展示ケース 6：現代の陶磁器生産工程、現代陶芸作家の作品の展示と作家の紹介、工房の写真など
⑧体験コーナー
⑨展示ケース 7：レンガや瓦の展示
つり下げパネル：キムラン村の地図（？？年以前と現在の比較）
⑩ 2 階建て。2 階部は収蔵庫。

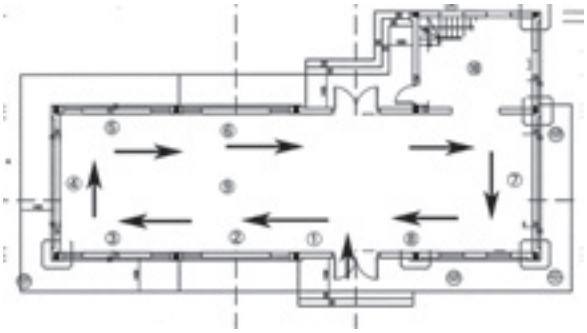

図 14　博物館フロアマップ

D. 展示品

発掘調査による出土品の良質のものはハノイ市博物館が所蔵することになり、展示資料について困っていたのだが、キムラン村古老グエン・ヴィエット・ホン氏とグエン・ヴァン・ニュン氏が 20 世紀末から収集していた陶磁器片には高級品や陶磁史の中でも珍しい資料が数多く含まれ彼らの採集品により充実した展示が可能となった。（図 16）

また、キムラン以外のベトナム陶磁として、岸本光正氏よりホイアン沖沈船資料（15 世紀ベトナム青花）の寄贈をしていただいた。他、西村の個人的収集品なども展示した。

日本の陶磁器を紹介するにあたり、有田町歴史民俗

図 15　博物館内の展示の様子

図 16　展示ケース

資料館より肥前焼破片資料を借用、大分美藍窯陶芸家河原畑伽兆氏、九谷焼陶芸家鈴木晶子氏（図 17）、四国の陶芸家久米誠治・安斉直子氏（図 18）から作品を寄贈していただき、展示として体裁のとれたものとなった。

図 17　九谷焼陶芸家鈴木晶子氏と寄贈陶器

図 18　久米誠治氏作南蛮水指　在ベトナム大使館茶室にて撮影

E 現代陶芸家作品の展示

キムラン村の現代陶芸家の作品を展示しようと考え、キムラン村で、陶磁器コンテスト出品作品を募集した（図 19）。

図 19　コンテストに出品した陶磁器と採点者

図 20　寄付者・協力者の名前が刻まれた石碑

F 寄付者・協力者への感謝を込めた石碑作成

寄付していただいた方や協力者の名前は石碑に刻まさせていただいた（図 20）。この石碑に、キムラン村の 14 世紀の陶磁器のモチーフを使用したデザインを作成したのだが、石碑製作者の美的センスで修正されてしまい、悔しがっていると、キムラン村が費用を提供してくれることになった。

4）開館式

そして、2012 年 3 月 20 日に開会式が行われることになり（図 21）、博物館建設当初から支援してくださった、江本孟紀氏、岸本光正氏、黒田宣正氏、和手甚京氏、元在日本ベトナム大使館公使グエン・ミン・ハー氏夫妻が駆けつけてくださり、ベトナムの考古学研究者、歴史学研究者やメディアを含めた多くの人々が出席した。2007 年 11 月に資金贈呈式を行ってから、5 年の月日がたってしまったにも関わらず、せかすこと

図 21　開館式でのテープカット

なく暖かく見守っていてくださった、関西・中京の財界の人々の応援は本当にありがたかった。

5）開館後の様子及び今後の予定

2012 年 3 月 20 日に博物館の開館式を行ったものの、展示の説明パネルなどをより充実させるために、パネル作成を行った。また、研究成果をより活かすために、村の中にいながら世界が認識できるようなパネル、陶磁器を通じた日越交流史、陶磁器作成の技術について説明されたパネルを作成中である。

キムラン陶磁器歴史博物館の展示が充実した段階で、来年度は、陶工への技術指導プログラムや、キムラン村の古老の歴史研究会を主体にしたキムラン村史の講座、パンフレット作成、観光産業としてのマネジメントなどを行っていく予定である。

5．文化資源学とは

筆者は、文化資源学とは文化資源を見いだし、活かし、市民に還元する方法を導き出す学問であると考える。文化資源を活かす為に、様々なイベントを実施することは、商業ベースでも行うことができるが、学問として、何ができるかは、文化資源に関連するそれぞれの基礎学問（考古学、歴史学、地理学、民族学など様々）の結果に依拠するものだと考える。私達の場合は、考古学や民族学を軸とした研究があり、その学術的根拠の元に確かな情報を提供できる展示を実現した。このキムラン村の 2001 年の発掘調査から博物館建設に至るまでの諸活動は、考古学や民族学という研究が市民に還元できた一つの成功例であると考える。

今回の場合、キムラン村の人々は、経済的に勢いの強い集落であるバッチャンの周辺の村落として、バッチャン村の窯主に雇用されていた。バッチャン村の人々は自尊心が強い。隣接する村ではあるが、村落間で上下関係があり、バッチャンは周辺を蔑視する傾向があった。ところが、キムラン村で遺跡が発見され、専門家により正しく古くまで歴史が遡ることが確認され、また李・陳朝期の陶磁器生産も明らかになり、村の人々は自信をもち、輝くようになっていった。

図 22　開館式参加者らと博物館の前で記念撮影

「考古学は地域に勇気を与える」という森浩一先生の言葉がある。これは、文化資源学という学問が日本に導入される以前に森先生が考古学を通じて実感された言葉である。

まず、自分が鍛錬してきた学問を通じて、研究を行い、いい成果を出すことが文化資源学にとって大きな前提であり、その知識・経験を活用して、地域や市民に貢献していくというスタイルは、文化資源学の基軸になると考える。

謝辞

この調査・研究を実施するにあたり、2010 年及び 2011 年度は、金沢大学の組織的な若者研究者など海外派遣プログラム〈文化資源学フィールドマナジャー養成プログラム〉、2012 年度は「住友生命未来を築く子育てプロジェクト・女性研究者への支援」からの助成を受けた。建設費、展示ケース作成などは、有志の方々に寄付していただいた東南アジア埋蔵文化財保護基金の資金等を使用している。

参考文献

西野範子 2011「ベトナム北部の窯業集落、キムラン・バッチャンの窯業技術研究～現在から過去に遡る 20 世紀の製作技術の変遷史とその要因～」『考古学と陶磁史学 佐々木達夫先生退官記念論集』金沢大学考古学研究室、286-326 頁

西野範子 2012a「ベトナムにおける考古遺跡の保存・整備と活用 ～キムラン社バイハムゾン遺跡を事例として～」『金沢大学文化資源学研究』第 4 号、17-24 頁、金沢大学国際文化資源学研究センター

西野範子 2012b『考古学と民族学研究からみたベトナム陶磁史 - 李朝期から現代まで -』金沢大学大学院人間社会環境研究科提出博士論文

西村昌也 2003「世界の発掘調査 - 東から西から Vietnam ヴェトナム」『文化遺産の世界』vol.11, 20-21 頁

西村昌也 2005「キムラン研究覚え書き：川べりの手工業専業集落の歴史地理的概要」『ベトナムの社会と文化』第 5・6 合併号：80-93 頁

西村昌也 2007『紅河平原とメコン・ドンナイ川平原の考古学的研究』東京大学提出　博士論文

西村昌也 2011『ベトナムの考古・古代学』同成社

西村昌也 西野範子 2005『キムラン・バイハムゾン遺跡第 2 次発掘報告』ヴェトナム歴史博物館資料

西村昌也・西野範子 2011a「キムランとバッチャン～隣りあう窯業集落の対照性」『現代ベトナムを知るための 60 章』明石書店、90-94 頁

西村昌也・西野範子 2011b ベトナムにおけるパブリック・アーケオロジーの実践：10 年間の活動経験からの経験則『テキスト 文化資源学』、金沢大学国際文化資源学研究センター、29-39 頁

Nishimura Masanari & Nishino Noriko 2003Chronological Sequence for Late 14th to Early 15th Century Vietnamese Ceramics from Bai Ham Rong, Kim Lan site and Ho Citadel.『東南アジア考古学』23 号：145-163（英語）